令和 5 年度 東京都立白鷗高等学校・附属中学校経営報告

校長 池戸 成記

1 今年度の取組と課題 総論

(1) 「完全中高一貫化」への取組

高校入試の停止及び中学増学級の開始による「完全中高一貫化」に対して、より良い教育課程を構築するために、分掌主任による検討会、各分掌と全学年主任による意見交換会、教科主任会議によるカリキュラムの再考などに取り組んだ。これにより課題も成果も明確化され、令和 7 年度に向けた教育課程の編成が進んでいる。

(2) 本校の特色への取組

ア ダイバーシティ教育

- ① 5 年ぶりに 3 学年の海外研修旅行を実施し、オーストラリア短期語学研修と併せて海外渡航によるダイバーシティ教育の機会が少しずつ復活し、成果が見られた。反面、円安や物価の高騰などにより家庭への負担が大きくなったことは今後の大きな障壁である。学年全員参加による海外研修旅行と学年をまたがった希望者の選考による短期留学のバランスを見直し、国際理解・ダイバーシティ教育の発展的な再構築を検討する。
- ② フランスやインドからの大きな教育視察団の受け入れを実施。C I E E、フォンテーヌ校から団体での留学生を受け入れ、その他個人留学生の受け入れを随時、多数行い、本校生徒との交流の場を創出。
- ③ ダイバーシティカフェ、韓国延世大学関係者による大学説明会など外部人材を活用。
- ④ 東京都教育委員会による S T E A M 海外派遣研修派遣、その他、各短期留学プログラムに参加生徒多数。
- ⑤ 学校評価アンケートの生徒結果では、「世界の様々な国や地域、多様な文化への興味や関心が高まった」という問いに対して、肯定的な意見が 84%であった。更に特色化を進めていきたい。

イ 探究活動

- ① スキルベースの探究活動については、軌道に乗ってきた部分と単発的になりがちな部分とが明確になりつつある。6 カ年の縦軸と、教科横断的かつ各学年で求めるキャリア教育と結び付いた横軸を再構築し、真に自身の探究心を深める探究活動とキャリアに結び付いた論文作成を目指す。
- ② 生徒が考える海外研修旅行の企画・検討・運営を行い、令和 6 年 8 月に実施予定
- ③ 各学年の計画に基づいてフィールドワークや、体験活動、資料のまとめ、検討会及び発表を実施。
- ④ 学級減による一時的な定数減や人事異動による体制の変化の中で、いかに共通認識をもって探究活動を進めるか、課題意識を持って臨んでいく。

ウ 日本の伝統文化学習

- ① 総合的な探究の時間や人間と社会の活動において、数年ぶりの浅草流鏑馬への参加や鳥越祭りへの参加など、地域の伝統芸能や文化との連携が復活し、深化した。しかし、学校評価アンケートでは地域の方の 26%が、本校が地域の行事に参加していることを「知らない」と答えており、広報も含めて更なる地域連携の広がりを図る必要がある。
- ② 和太鼓部の浅草寺での演奏、百人一首部の全国大会出場など「地域の中の白鷗」「伝統文化の白鷗」としての活躍が顕著な年であった。
- ③ 上野・浅草探索や伝統文化体験、地域行事関係者の話を聞く会など地元根付く学習活動を実施した。

(3) 理数研究校

すそ野を広げ、突出した生徒にはその発現機会を与える活動を主とした。新たな試みも多く、参加生徒数が飛躍的に伸びた（延べ 1100 名）。学校評価アンケートの生徒結果では理数分野への興味が高まったという生徒が 70%であり、今後もさらに経験のすそ野を広げると共に高い探究意欲のある生徒へのアプローチを向上させていく必要がある。

(4) 進路状況・募集活動

- ア 6年生の大学合格数は国公立大合格者は微減、難関私大は増であった。
- イ 医大、海外大学進学者は0であった。
- ウ 進路指導部による分析を経て、生徒の希望に沿った合格状況を作るための方策をたてていく。その際、生徒が高い志をもって主体性と向上心をもって取り組む姿勢をさらに育成することと、探究とキャリア教育のより強固なつながりを目指す。
- エ 学校評価アンケートの生徒結果では、「学校では将来について考える機会が持てる授業や行事がある」という問いに対して 90%の生徒が肯定的な意見となった。今までの取組をさらに高めるとともに、学年に応じた6ヵ年のキャリア教育を推進していく。
- オ 都立中高一貫校10校中9校が前年比で応募倍率を落とした。その中で、唯一の5学級募集であり、改築時期にあたるにも関わらず、前年比減が3番目に少なかった。積極的な広報活動の成果であるが、「改築中のデメリットをメリットに変えていく」募集対策を練り、今後も発信していく。

2 今年度の重点事項に係る自己評価

項目	内容	実績	評価
ア 学習指導	① 全教諭が年4回以上の授業見学を実施し、教科指導力の向上を図る。	本年度より報告書作成を廃止し、負担を減らしながら実施したが、相互授業見学の意識は停滞した。授業力向上のための方策を今一度浸透させたい。 学校評価アンケートの生徒結果では「授業に満足している」という問いに対し「そう思う」が33%、「だいたいそう思う」が57%と肯定的な意見が約90%となっているが、「そう思う」の割合を増やすための研鑽が必要である。	C
	② 予備校等主催の授業力向上セミナーに若手教員を参加させ、教科に還元する。	延べ17名が参加。その他、外部研修に参加する教員もいる。学期中には授業があり、全体的に校外への研修機会が低調。オンライン講座等を活用させたい。	B
	③ 生徒による授業評価および生徒実態調査を実施し、これらの結果分析を授業に反映させて授業改善に取り組むとともに、次年度の教科目標を策定する。	外部機関を活用し、詳細な分析を実施。全体への還元研修及び教科内でのフィードバックを実施。次年度の教科指導の目標、指導方法に活用できるかどうかで評価。次年度は実施時期を遅くし、より生徒が評価できる期間を長くとり意見を反映させやすくしていく。	B
	④ 授業改善、授業力向上等に関する校内研修会の実施	予定通り実施。総合的な探究の時間の指導法を東西それぞれで実施。伝達講習、模試分析結果の教科への活用法、生成AIについての還元研修等を実施。実践に基づいた教員間の意見交換・検討会をさらに充実させる機運の向上が必要。	B
	⑤ ICTやCYODの活用による授業の工夫とその効果検証の実施	ほぼすべての教員がICTを活用。今後は優良実践の共有化を図っていく。また、学習効果について検証法の開発が喫緊の課題。	B

	⑥	中学校段階での自宅学習時間の確保とその把握	課題への取組時間を除いた自主学習時間ではあるが、1学期に比べ中1で約2/3に減少。全体的に中2が低迷。課題量とのバランスが課題なのか、自主性の育成不足なのか、考察を重ねていく。	C
	⑦	小テストや課題の量、頻度等についてその効果を検証しながら適切な負荷になるよう教科間での情報共有と学校全体としての指導改善に努め、生徒の学力向上に資する指導を行う。	調整は実施しているが、年次進行の目標から導いた課題の目的、量、内容に学校全体して取り組むことが課題。生徒は数年前に比べ、課題の量やスピードの負荷に堪えられない傾向にある。	C
	⑧	年間実施計画に基づく組織的な英語・漢字・数学検定の実施とその結果の指導への反映。	計画通り実施。中3で東京都グラフコンクール東京都教育委員会賞受賞など新たに入賞の実績。中3の英検準2級取得率は80.9%で昨年度を上回ったが、高1GTECのCEFRA2は目標の99%には届かなかった。	B
	⑨	「理数研究校」として外部機関主催の講演会やコンクール等への参加、本校への大学教授の招聘等による講演会の実施等を積極的に行い、また、校内においても生徒と教員双方が好奇心を持って取り組める（ワクワク感のある）企画を立案し、理数教育への生徒の興味・関心の喚起と指導の充実を図る。	講演会・体験などには延べ235名、コンテスト96名、イベント・講座に61名、海外交流（次世代リーダー含む）149名が参加。全体では50を超える取り組み（留学除く）を実施し、参加者は延べ人数ではあるが1100名を超え、チャレンジする生徒と、深い興味はないが参加してみようという体験型の生徒が増えた。	A
	⑩	探究活動に全校体制で取り組むとともに、個人で取り組む探究論文を完成させ、生徒の主体的な学びを支援する。	探究活動は計画通り。但し、論文作成については、全校体制は敷いているが、活動意欲が足りない生徒も一定数存在し、優秀な探究論文との幅が広い。学校評価アンケートの「生活の中での自分の身近な疑問を解明したいという気持ちが高まった」という問いに対して、肯定的な回答は73%であり、「進学指導を重視した教育が行われている」の93%と比較するとまだ低い。探究活動や論文作成の意義や目的の再確認と浸透が課題。	B
	⑪	「Global Education Network 20」指定校として英語コミュニケーション力の一層の充実を図る。	コミュニケーション能力は向上。海外からの視察等にも積極的に絡めている。CLILL授業を実施し、公開。中学3年生の英検準2級所得率80.9%、GTEC高1平均CEFRA2が97.1%。更なる実践の場の構築を検討。	A
	⑫	保健体育において、デジタル機器の活用により、一人一人に合った個別最適な方法で力を伸ばす取組を研究・実践する。	自身の体の使い方等を客観的に把握するツールとしてデジタルが機能し、自己認識力が向上。改善にどうつなげるかが今後の課題。	B
イ 進路指導	①	中学2年での職場体験、職業講話等について、見直しを図りつつ実施し、生徒の適正な職業観や勤労観を育成する。	体験・講話とも計画通り実施し、新たな職場の開拓などもできた。探究活動と密接につながるキャリア計画を遂行するために開発部との連携を強化していく。	B

	②	印刷物、保護者会、学習支援システム等、あらゆる媒体と機会を捉え、進路情報の発信を、主に進路部主導で行う。	進路指導部だけでなく、学年や分掌からの通知は徹底できたが、進路情報の発信は進路部が積極的に行った。	B
	③	5教科による勉強集中週間（5学年対象）を夏季休業中に実施し、学力伸長と大学受験に向けた意識啓発を図る。 中学、高校ともに、長期休業中の講習・補習の充実を図る。	宿泊希望性であった勉強合宿を今年度から通いとすることで、全生徒の参加体制とした。これによって学年全体の学習に向かう姿勢の育成には寄与できた。今後は、3年生4年生の学習に対するモチベーションの維持向上対策と「白鷗の6年間」の明確化に取り組んでいく。	B
	④	高校3年夏期講習60講座以上設置、延べ参加者数8,000人以上。	42講座、3527人（昨年度と統計方法を変更）。学校評価アンケートの「補習・補講・講習は十分に実施されている」という問いへの生徒の肯定的な回答は96%であったが、保護者は70%であり、需要に応じた計画的な立案にさらに努めたい。土曜講習は年間30回を超える教科もあり、特に6年生の受験対策に寄与。	B
	⑤	模擬試験結果分析会、共通テスト検討会等を年4回以上実施し、全教職員が生徒の学力の現状を把握して教科指導に生かすとともに、生徒一人一人に即した指導内容の共有化を図る。	合計10回実施。分析会、検討会の方式を参加しやすい形式に変更したことにより有効感が高まった。しかし、他教科、他学年の情報の共有化、浸透度はまだ不十分。学校全体で捉える体制の構築に努めたい。また、生徒へのフィードバック方法もさらに検討したい。	B
	⑥	チューターの活用とともに自習室の有効活用を図る。	支援員延べ152人が従事。生徒の活用は明らかに増大。教科担当者との連携をさらに図ることが課題。参加生徒延べ3592名。	B
ウ 生活指導・ 部活動	① -1	・自主的・自律的な生徒会、委員会活動とその活性化を図る。 ・挨拶の励行と時間厳守等、基本的な生活習慣の確立と規範意識の育成を図る。 ・年間皆勤者数、学年平均60名以上。	・生徒会、委員会活動の活性化、全校生徒への見える化はやや向上した。「生徒会活動は活発に行われている」に対する回答で肯定的な意見は62%であり、生徒の自主性の育成と自治意識の向上に向けた教員の取組が課題 ・遅刻者の延べ人数が増大。5,100→6,600。皆勤者1年40名2年27名3年13名4年19名5年44名6年19名	C
	① -2	規則や制服規程等に関して生徒が主体的に関わり自律的に遵守する姿勢を育成する。また、規則だけでなくモラルやマナーなど規範意識の醸成に努める。	教員・生徒会3回会合、生徒会のみで検討10回程度。「生活指導は適切に行われている」に対する肯定的な回答は85%。	B
	②	体罰実態調査を実施し、結果に対して迅速に対応するとともに、いじめの実態把握アンケートを年3回行い、いじめの未然防止、早期発見、早期対応に資する。	いじめアンケートは予定通り実施。いじめの兆候を漏らさずにいじめ防止対策委員会を2回実施し、早期対応、適切な対応が行えた。	A
	③	with コロナの環境下における行事の実施に向け、創造と工夫、協働の下に、困難に負けずに	生徒の実行委員会が機能し、ブランクを感じさせない行事が進行された。特に体	A

		行事を成し遂げる強さを育成し、人間関係の構築とリーダーの育成を図る。	育祭では初めての場所で教員がマイクを持たずに進行できたことにより。生徒が成長。	
	④	部活動への加入率を上げ、その活性化を図るとともに、中学・高校ともに、都大会相当以上の大会に3団体以上の出場を目指す。	加入率増(R4)81.4%→(R5)97.4% (延べ数) 吹奏楽全国、百人一首全国、軽音楽関東、和太鼓関東、中学卓球部都大会出場。 中高一貫校大会での優勝、入賞有。 その他地域での活動有。	B
	⑤	仮設校舎建築工事開始に伴う部活動の外部施設利用を円滑に進める。	屋外競技については、運動施設賃借料の確保、次年度以降の新たな小学校校庭の確保はできた。「部活動に満足している」に対する肯定的な回答は81%であるが、施設などの環境整備は十分ではない。地域的な問題もあり、改善策が難しいところであるが、今後も取り組んでいきたい。	B
	⑥	「文部一道」部活動と学業との一体化を図るためのアプローチを推進する。	部活動加入率も高まり、精力的な活動がみられ、コンテストへの参加などの実績が増えた面もある。中学3年生の高校部活動への参加体制を改善した。	B
エ 国際教育 探究活動 地域連携	① -1	オーストラリア短期留学や、中学3年生のアメリカ研修旅行、フランス姉妹校との短期留学等を改善実施し、海外交流事業の活性化を図る。	フランスについては、交換留学という形が障壁となり中止。来年度以降の形態を相手校と検討し、実施の目途が立った。中学3年生の海外研修旅行は5年ぶりに実施。目的と実施内容の更なる精選に取り組む。オーストラリア短期留学の希望者は募集人員に対し約2倍。多くの希望に応えるために来年度以降募集人数増を検討。	A
	① -2	次世代リーダー育成道場への参加を積極的に促し、留学の推進を図る。最終合格者数を2桁台とすることを目指す。	11名応募、8名合格。 一けた台ではあったが、コンスタントに意欲のある者、合格者を出せている。	A
	②	「生徒が作る研修旅行」の取組を、中学4年生の探究活動の一環として実施する。	生徒は積極的に参加し、3コースが決定。探究目的の渡航という当初の狙いは困難であったが、決定までのプロセスには生徒の自主性と積極性が発揮された。令和6年8月に実施。	B
	③	海外大学進学を目指す生徒の発掘・育成とその指導の充実を図る。	計画ではなかったが、延世大学の募集活動などを実施できたことは良。保護者、生徒向けの海外大学説明会を実施。本年度海外進学者は0名	C
	④ -1	日本の伝統文化理解教育を地域研究に発展させて、「上野・浅草学」の充実を図るとともに、防災教育で地域との連携を強化・充実させる。	「上野・浅草学」は充実しているが、更なるブラッシュアップも検討。防災教育の地域との連携は、校舎の改築もあり、停滞。生徒を巻き込んだ連携方法を検討し、充実を図りたい。	B

	④ -2	「人間と社会」のボランティア活動を通して地域の伝統と文化の理解に努め、地域との共生を図る。	浅草流鏑馬や鳥越祭り、かつば橋道具祭りなど多くの体験を積ませていただいた。生徒の地域理解、地元理解に寄与したが、生徒の満足度は全体で73%（保護者82%）であり、取り組める学年ごとの差異がみられる。	A
オ 健康づくりの 推進	①	新型コロナウイルス感染防止の観点から、生徒自身が自らの心身の状態に向き合い、自身と社会の健康を大切にすることを育成する	コンディションレポートの活用を中心としたセルフコンディショニングの意識啓発に努めた。個人差が大きく、教員の労力の割に生徒の意識が向上しない傾向もあり、要検討。	B
	②	スクールカウンセラー及び特別支援教育コーディネーターを中心に、教育相談委員会を通じた生徒状況の把握とその対処法を全教職員で共有する。また、通級による指導等を通して、特別支援教育に積極的に取り組む。	通級指導等にコーディネーターが積極的に関与した。教育相談委員会高校3回実施、通級R5は4年生2名（共に通級開始後、転・退学）	B
	③	東京都の「エンジョイ・スポーツ・プログラム」事業の指定を受け、スポーツを楽しみながら生徒の基礎体力の向上を図ることを目指すとともに、健康、安全、環境、食育等に対する生徒の意識向上に組織的に取り組む。	授業87コマ、放課後部活動25コマ実施。体力・運動能力調査で平均を上回る項目が増加した。	A
カ 募集広報 活動	①	塾・予備校等の説明会に参加するとともに、オンラインツールを活用した募集・広報活動も積極的に展開する。	外部の説明会11回参加。全ての学校紹介行事参加者は昨年度4,120名から5,903名に増加。	A
	②	海外帰国・在京外国人枠、特別枠、一般枠、それぞれの募集枠で本校が求める生徒像を明確にして広報活動を実施する。	海外帰国・在京外国人枠、及び特別枠については応募者が増え、倍率が出た。積極的かつ丁寧な問い合わせへの対応を行った結果と考える。一般枠は倍率が低下したが、都立10校中3番目に低い低下率であり、積極的に外に出る広報活動がある程度効果的であった。	B
	③	全面刷新した学校案内（スクールガイド）をアップグレードしながら活用し、完全中高一貫化した新しい白鷗を全面的に広報する。	効果的かつ視覚的にも良好な学校案内を作成したことで、募集活動も活性化した。	A
	④	ホームページの更新を300回以上行い、広報活動に最大限活用する。また、英語・第二外国語の授業と連携して、海外に向けた発信も行う。	HPの更新は前年度493回から530回以上に増加。できるだけリアルタイムの情報が届くよう、また、帰国・在京枠、特別枠の情報を増やしていくことも課題。	A
キ 学校運営	①	中高の情報共有・情報交換の促進と統一した6年間の完全一貫教育指導体制を構築する。分掌及び学年、教科での年間目標と年度末の検証を実施する。	分掌主任会議による検討、各分掌と各学年主任による今後の課題に関する情報共有会議、教科主任会議における7年度以降のカリキュラム改編の検討・協議を進め、積極異質な議論ができた。	A
	②	経営企画室の業務進行管理を行い、職員の健康管理、ライフワークバランスを可能な限り図っていく。	繁忙期は人によって違うが、年間を通して残業時間が多いことが課題。	B
	③	予算編成・執行、施設管理、学事業務、窓口業務等の適正実施をさらに推進する。	経営企画室のチームワークにより適正に実施。	A

	④	東校舎改築とそれに先立つ仮設校舎建築に向けて校内体制を整備し、発生する諸課題に迅速に対応して最善の対応をとる。	都度、業者及び都担当所管との連携を図れた。先行きが見えないところが多々あり、校内体制の整備は遅れている。	A
	⑤	I C T機器の活用による校務効率化と業務縮減に取り組み、また、時間外労働時間の個票配布等によってライフ・ワーク・バランスを推進する。	個票配布等により推進を試みたが、年間平均で、45 時間越えが 34 人/月、80 時間越えが 11 人/月 m100 時間越えが 5 人/月であった。次年度以降は各人の具体的な取組を自己申告項目とし、削減に努めたい。	C
	⑥	全教職員が公務員であることの自覚を持ち、服務規律を徹底する。	定期的な研修会のほか、会議の冒頭にて服務に関する連絡を年間通じて実施。ヒヤリハットもあったが、それを発見できる校内体制が機能してきたことは評価できる。ミスを絶対にしないのが大前提であるが、チェック体制を完備することを今後も実施していく。	B

3 本年度の数値目標と結果

項目	目 標	対象・内訳	令和4年度実績	令和5年度目標	令和5年度実績
①	自宅学習時間	中学生	1 時間 5 3 分	1 時間 5 0 分	1 時間 4 分 (塾除く)
		高校生	2 時間 3 3 分	2 時間 4 0 分	1 時間 1 分 (塾除く)
②	進路決定合格者数 (現役)	国公立大 難関私立大 (早・慶・上・理) GMARCH	国公立大 50 名 難関私大 76 名 GMARCH 152 名	国公立大 60 名 難関私大 85 名 GMARCH 170 名	46 名 92 名 178 名
		難関国公立大学合格者	7 名	10 名	5 名
③	夏期講習参加者	中学生	3, 422 名	延べ 4, 000 名	1970 名*
		高校生	7, 225 名	延べ 8, 000 名	3592 名*
④	皆勤者数	中学・高校学年平均	平均50名	平均60名	平均27名
⑤	説明会等参加者	小学生とその保護者	対面 3, 263 名 オンライン 857 名	6, 000 名	5903 名
⑥	一般枠倍率	中学校	4. 55 倍	5. 0 倍	4. 20 倍
⑦	英語力向上	中学校	英検準2級以上 79. 7%	英検準2級以上 90. 0%	80. 9%
		高校	CEFR A2以上 高1 100% 高2 98. 5%	CEFR A2以上 高1 99. 0% 高2 99. 0%	97. 1% 97. 8%

*集計方法を変更。純粋な夏季特別講習参加者のみ計上 次年度以降もこの集計方法で経年変化を見る
□囲みは目標値達成、もしくは前年度より良化した数値